

その間、館内には、たまたま前面道路を歩いていた人も含め、近隣の人々が次々に避難して来て、2階、3階、4階の宴会場に300名程の人々が着の身着のまま身を寄せ、外からの助けを待つことに。当日は夜の宴会も予定されていたので、その料理を少しずつではあったが提供することができ、ともに不安のつる真っ暗な夜を声を掛け合いながら過ごすことに。

一夜明け、翌朝、昼近くになってから2階の主厨房で携帯用ガスコンロで取り敢えずの間に合わせの食事を作り、提供。夕方、暗くなる前に、夕食代わりになる食事を準備しようとしていたところに自衛隊の救出部隊が来館。避難者全員を市の文化センターまで誘導してゆくことなる。

私の自宅には、長男、次男、別世帯として結婚を間近に控えた三男とその婚約者が一緒に住んでおり、その日は、体調を崩して仕事を休んでいた三男の婚約者と夜勤のための次男が自宅に残っていた。地震の後、一次避難所になっていた小野屋ホテルに避難して無事だったが、直ぐ近くの石油コンビナートの火災が燃え広がる恐れがあるとして、陸上自衛隊の多賀城駐屯地に避難。

私も館内の従業員も含め全員の避難を確認後、2晩目は多賀城駐屯地で家族に合流。満足に寝返りも出来ず、コンビナートの赤い光がめらめらと窓越しに差し込む中、まんじりともしない一夜をすごした。

そんな中、教育隊の若い面影を残す若い隊員達が避難住民に非常用毛布、食事、中には自分の持ち物である運動着までもを提供し、活動している光景を目の前にし、こうした自衛隊の活動は、仕事とはいえ本当に頼もしく、頭が下がる思いであった。

翌日13日は、天候も良く、水もようやく引き、コンビナートの火災もほぼ収まったので、自宅の様子を見に戻ったら、三男夫婦のため前の夏にリフォームしたばかりの1階は2mもの泥水でめちゃくちゃ。2階は倒れた家具等を片付ければ何とか住めるという状況だったので、私たち家族と近所に住む義姉夫婦を含めて8人、犬3匹が肩寄せあって住むこととし、電気、水道が供給されて仕事を含め次の段階に進めるようになるまでほぼ1ヶ月、その日の食事、水、充電、ガソリン等の手配を手分けしながらの生活が続いた。

事業場であるホテルの再開に向けては、各人の生活も一息ついたかと思われる震災から2週間ほど経って全従業員を集めて話し合い、道路面より多少高い位置に建つ小野屋ホテルは津波被害も少なかったことから4月1日から全従業員を集中させて営業を再開。ホテルキヤツスプラザ多賀城は、津波の被害が大きく、1階部分がほぼ全壊状態であったため、2ヶ月後の6

月10日に宿泊棟の一部、その1ヶ月後の7月10日には消防許可を再取得することが出来、本館再営業、全館を再オープンさせることが出来た。

被害の状況を考えれば、こんなに早く再開できるとは思っていなかったが、装置産業の一面を持つホテルという事業上、震災以前から建設、電気、設備業者等とは普段からメンテナンス取引が密接にあり、これらの各業者に早い段階で動いてもらえたことによるものと思う。

震災を含む災害は、その損失も多く、人々を正しく前途多難な状況に追い込む。そこで大事なことは、何とかして前に進むんだ、自らが立ち上がって復旧し、復興させるんだという意思を強く持つことではないかと思っている。後に震災復興のグループ補助金を使えたことも大いに救われたが、先ずは自分がいかに冷静に判断し、それを成し遂げるために行動していこうとする気持ちが大切ではないだろうか。自立する姿を見せれば、助けてくれる人はたくさんいることをこの震災を通じて実感することができた。

様々な形で、様々な方々に助けていただいた。本当に感謝しております。

『地震が来たらまずは高所に！』

伊 東 清 一 (スポーツ用品販売)

心臓に持病を持っている私は、定期的な診察を受けるために東北厚生年金病院の待合室で順番待ちをしていた時に地震に見舞われました。強い揺れが収まるのを待って会社に電話を入れると、事務所内はめっちゃめっちゃになっているとの報。不安が募るばかりでしたが車も動かせず、他の移動手段もない中、やむをえず病院に1泊せざるを得ませんでした。

翌朝、仙石線の線路伝いに泥だらけになりながら歩いて多賀城まで帰ってくると、事務所の商品は地震で倒れ、追い打ちをかけるように津波までかぶって全滅。八幡3丁目の自宅も、床上1.8m.まで浸水し、内部は泥まみれ。1ヶ月以上、毎日泥かきに明け暮れる日々が続きました。ただ、幸いなことに身内に亡くなったりした人がいなかったことだけが救いでした。

自宅はもちろん住むことができず、生まれて初めてアパート暮らしを経験。衣服や食料を多くの人の善意で支援していただき、その温かな心遣いに対する感謝の気持ちはこれからも決して忘れることはないでしょう。

今回の震災では、地震がきたらまず高所に逃げる以外にないことを

学びました。そして多賀城は昔、大半が海だったことも忘れないようにしなければなりませんし、地震が起きれば津波が来ることも教訓としてしっかりと自覚しておかなければなりません。震災時は通信手段も途絶えることを見越し、家族の安否を確認するためにも、待ち合わせ場所をあらかじめ決めておくことも大切になります。

「災害は忘れたころにやってくる」とはよくいわれますが、この災害を経験した者として後世に語り継いでいくことが責務と思っています。とともに、復興への歩みを続けている中で”多賀城らしき”を意識したまちづくりを進めていっていただければと願っています。

忘れたくない2011・3・11

大場 光夫 (家具販売)

2011・3・11 PM 私と妻は、事務所2階にて執務をしていました。突然の揺れに襲われ、机の上のパソコン、書類関係、書庫の中のカタログ類がすべて崩れ、足の踏み場もないくらいになりました。取り敢えず、外に脱出しました。母屋の縁側のサッシュ戸がロックしていたのが全て外れ、空いていました。

愛猫(普段外には出していない)が外に逃げたのではないかと心配し近所を一時間ほど探し回りましたが、見つかりませんでした。(3日後に押入の中にいるのを発見、無事でした)

その時、道路から右側は黒い水・左側は緑の水が押し寄せてきました。我が家は、ご近所より多少土地嵩があると高を括っていたら、だんだん水かさが増してきて、駐車場にある我愛車BMWが浮き流されて行き、他2台は水没しました。

拙嗟の時、何をしたら良いのか思いつかず、携帯で写真を撮り1階にあったゴルフバックを2階に上げただけでした。日没となり、停電・断水・余震に怯えながら事務所2階にいましたら、隣のご主人が屋根伝いに猫3匹を連れて現れ、共に一夜を過ごしました。

翌朝、水かさは減り自宅に入れるまでになっていました。食糧・飲料水(冷蔵庫の中)・カセットコンロ・鍋・食器は何とか無事でした。津波による浸水は、倉庫で1m・自宅で30cm.ありました。

さて、これからどうしよう。頭が真っ白です。後片付けをしながら「…

…」。何にも考えられない。3日過ぎあたりから、ロータリーの仲間(当時
会長大場裕之さん、現会長鈴木誠さん、板橋恵一さん等)からの励ましのこ
とば、おにぎり、お酒等の差し入れをして頂き、大変うれしかった。
また、ボランティアの方に床下の泥の掻き出しに来て頂いた方々、友達、
仕事仲間、近所の方々との励まし合いによって、頑張っ生きてしようと思
いました。

今、こうして振り返ると当たり前の事であるが、「人は一人では生きて
いけない。友達、仲間は大勢の方がよい」と実感する、忘れたくない
2011・3・11での出来事であったと思う。

『がんばらなくてもいいのです。生きてさえいれば。』

林 智 (庭師)

その日は妻を仙台に送り届け、必号線の原町付近を自宅に向かって運転
していました。ラジオの地震警報と地面から伝わる異常な音で2車線の内側
で、高いビルのない所を選び停車しました。ここまでは割と冷静に対処で
きました。その後、大きな揺れが来て、車に掴まっているのが精一杯でし
た。

妻や子供達に電話をしましたが当然繋がりません。仙台に兄や姉が住ん
でいましたので立ち寄り、互いの無事を確認致しました。妻と連絡がとれ
たのは4時頃、高砂付近を待ち合わせ場所と決めて、会えたのは夜の8時頃
でした。車を置いて徒歩で自宅へ向かいましたが、仙台と多賀城の境まで
しか行けませんでした。

車中で1泊し、翌朝自宅に着きました。住まいは2ヶ所あったのですが普
段生活していた所は、家の中で1.5m位まで水が入り目茶苦茶でした。もう
一方の家は、(地盤の高さは同じでしたが)高気密住宅で、しかもガラスが壊
れなかったので、床が濡れた程度ですみました。会社の状況は、道具や車
を含めすべて流出していました。家族全員の無事が確認できたのは、その
日の夕方でした。

震災後、よく「がんばれ」という声がありましたが、お勤めしていた方
で会社も危機な状態の方は、(家庭の中ではがんばれますが)どうしようも有
りません。ロータリアン(経営者)は、会社の再建に向けてがんばる事が一番
大切な事だと思います。

子供達へのメッセージとしては、命を守る為に、まず立ち止まるか、逃げるかを判断する事。判断できにくい時は、側にいる大人の人に助けを求めましょう。震災後は色々なストレス等が溜ると思いますが、解決方法は、まず言葉に出す事です。自分より酷い被害の人がいると思い、声を飲み込んでしまうと、又ストレスが溜ります。

がんばらなくてもいいのです。生きてさえいれば。

日本に生まれてきたことを誇りに

阿部 祝夫 (貸衣装業)

卒業式に入り大変忙しく、その日も朝3時から仕事、午後やっと一休み、その時ビルが激しく上下に揺れ社員はビルの外へ飛び出し、うずくまり、折り重なり、死に物狂いで外に飛び出しました。

仙台駅の周辺は物騒がしい悲鳴と自動車のクラクションがけたたましく鳴り響き、何が起きたか途方に暮れていました。我にかえって、まずみんなの安否を確認し、仙台サンプラザの式典会場へ向って見ると生徒さんたちは泣き叫び、怪我をしている人が大勢いました。私どもで手配していたパスを病院へと搬送にあたってもらいました。あとの話で、彼の会社は津波にのまれまして自宅も流されてしまいました。幸いに、翌日パスとともに戻り帰還できたとのこと、感謝と御礼の気持ちで心からの感動でした。ましてや仕事も終わり帰り道に自ら進んで、会社のこと家族の安否の心配があるのに、目の前にいる、けが人を見捨てることはできず夜遅くまで搬送に追われていました。

このように突然の災害に遭遇すると人間の精神状態の活性化に変わります。日本人としての慣習と歴史の風習がこのようにさせるのです。人を愛する心と奉仕の心、日本に生まれてきたこと誇りに思います。

『地域に貢献したいとの思いを強く』

伊藤 尚武 (屋根工事)

結婚式に出席するため、名古屋に滞在している時にあの東日本大震災が起きた。そのため直接、地震は体験していないものの、テレビニュースで映し出される光景はあまりにも衝撃的で、津波被害の状況などを観ていると「これはもう終わったかな」というのが正直な思いだった。

帰るに帰れない状況が3月いっぱいまで続き、ようやく夜行バスで仙台に降り立った時、仙台市内は「テレビで報じていたほどひどい状況じゃないなあ」というのが正直な感想だったが、会社のある沿岸部の産業道路沿いに来てみると、津波で流された車やがれきがあちらこちらに手つかずのまま残されており、自然の猛威をまざまざと見せつけられる光景に、言葉も出なかったことが今も鮮明に思い出される。幸い、仙台市宮城野区の高砂にある会社は津波被害こそなかったものの、地震の揺れで事務所の建物は大きな被害を受け、その後、立て直さざるを得なかった。

今回の震災では、いつ起きるか分からない自然災害に日頃から備えていくことの大切さを学ぶとともに、復興が遅々として進まない状況を見るにつけ、行政にもっとリーダーシップを発揮してもらいたいとの思いを強くしている。あまりにも”H人の声”を聞き過ぎ、まとめきれないような気がしてならない。

今は、震災という衝撃的な経験を経て、個人的に、そして仕事を通じて少しでも地域の発展に貢献していきたいというのが偽らざる気持ちである。ロータリーも、奉仕団体としての役割をもう一度見つめ直し、地域社会にもっと密着した活動を強めていくことが求められているのではないだろうか。

「ヘリコプター」

岩井 寛二 (歯科医)

今でも、ヘリコプターの飛行音を聞くと、上空を見上げ、あの日3月11日のことを思い出す。平成23年3月11日、いつもとおなじように午後の診療がはじまる。治療中にグラリ。「大丈夫、大丈夫」すぐおさまると思っ

ていたら、やたら長い。もうすぐと思ったら、もっと強いのがきた。患者さん、従業員を帰して外に出て近所の人達と話をしていると、いつもコンビニの前でたむろしているようなお兄ちゃん達が自転車でやって来た。「津波がきます。早く避難して下さい。」とふれまわっている。そのお兄ちゃん達の顔は蒼白で、どうも普通でない気配を感じた。「まあ家の近くの砂押川を津波がさか上ってきたとしても、堤防を越えることは絶対ないだろう」とは思ったが、あまりのお兄ちゃん達の追力に、いそいで避難することにした。

避難所は高崎中学の広いホール。雪もふってきて寒さがひどく車に移動。ラジオで被害状況を報じている。スーパーの天井が落ちて幼い子が亡くなったとのこと。不運でかわいそうにと思っていた。その後、若林区の海岸で200体以上の遺体が確認されたとの報道で、はじめて大津波がきていたのだと知った。(その後もっと驚くのだが)。

翌朝、家に戻る。砂押川をはきんで海側は地獄だった。あの時お兄ちゃん達が自転車でまわってくれなかったら、また彼らの言うことを聞かず、ここにとどまり、堤防がこのあたりで決壊していたら。今思うと、ぞっとする。だんだん被害の大きさが分かってきて、死者不明者が1万人を超えたということになって、私は覚悟した。それは「遺体検視」である。何日か後に「3月27日をお願いします」との連絡が入った。3月27日早朝、もう1人の歯科医師と利府の「グランディ21」の体育館に向かう。そこは普段コンサート等、どちらかという楽しいイベントが開催される場所である。しかしそこは今、一変して床一面ブルーシート。その上にたくさん棺の列。そしてこれから使われるであろう棺が山積みになっていた。御遺体の安置所と検視するところは、しきられてはいたが、棺の御遺体にとりすがる家族の悲鳴・嗚咽が耳に残る。ヘリコプターからおろされた御遺体がストレッチャーで次から次へと運ばれ、警察・医師・歯科医師で検視を行っていく。またへりが着く。運ばれる。また飛んでいく。次の日も次の日も、上空をへりが飛ぶ。海岸から「グランディ21」へ。そして「グランディ21」からまた海岸へ。

「人の情報をきちんと開こう。聞き入れよう。情報を正確に整理しよう。

そして自分なりに、その時、もっとも正しいと思える行動を素早く取ろう」

佐藤 良一（不動産仲介業）

街の「小さな不動産屋」をやっております。揺れが収まってから10分、ぐらいだったと思います。近くの国道を走る消防車のスピーカーから大津波警報が発令され10メートルの津波が来ると恐ろしい言葉が聞こえました。過去に床上浸水も経験した地域でしたので、これは大変なことになると直感して店はそのまま、家族が心配で帰宅しました。

道路は走る車も少なく、普段の半分の5分ぐらいで自宅に戻ったような気がします。

自宅は少し高台にあり、孫や家族全員の安全も確認でき、ほっとしていたそのとき、50メートルほど前の県道が真っ黒な流れでどぶ川のようになり、道路際の住宅に浸水していききました。身の危険を感じもう少し高台へと避難した時、いままで見えなかった海岸線の防風林もなぎ倒され、季節外れの雪の間にかすかに見え、なんと住宅らしき物まで押し流されているのです。移動がもう少し遅れていれば、間違いなく私たちが車ごと流されていたでしょう。

4日後にようやく海水も引け、今後の事など考えもないまま泥出しと泥と一緒にってしまった備品を処分、友人、先輩方のおかげで内装もしていただき、事務の必需品まで協力いただき、被災者の仮設住宅にするアパートの貸し出しを初日後には開始しました。

ただ当局は被災者の平等を気にしすぎるあまり、かえって不平等を引き起こし、被災者間の不満を作ってしまった気がします。

最後に、「のど元過ぎれば、何とか」と言いますが、その通りです。せめて震災は誰の身の上にもあり得ることだけは、忘れないでいてほしいもののご忠告いたします。

『多賀城の農業振興に意欲をもって』

板橋 恵一（アパート経営）

多賀城市役所の5階からは、うっすらと仙台新港が見える。多賀城の中でも、比較的高台に位置し、見晴らしの良い市役所内で、出席していた農用

地利用集積計画(利用権設定)の会議が終わりかけの頃、突然の揺れが襲った。

高台と交通量の少ないところを選んで自宅に戻ると、蔵の土壁は落ちていたがそんなに大きな被害はなかった。その日はちょうど、88歳になる父がデイサービスに行っており、84歳の母が不安がる中、倉庫からダルマストーブを出して暖をとったりしながら、日が暮れて少し落ち着いた頃に父を迎えにいった。

私の家は農家なので、米には不自由しない。ガスもプロパンなので使えた。水は、井戸水を煮沸して使った。水に困っていた知り合いには、大型のポリタンクをトラックに積んで運んだりもした。その意味で、個人的には地震の被害も少なく、比較的恵まれていたと思う。

震災後、自分の手短なところ、見聞きした部分を早く直せという要望が多く、避難所に救援物資は届くものの、在宅の被災者には手が回らない状況だった。津波ばかりがクローズアップされ、地震被害に公的な補助や支援が少なかったのも事実である。

多賀城は、多賀城・七ヶ浜商工会の尽力でグループ補助金の活用事例も多く、企業規模の大きな会社が核となって地場の企業を誘引してくれたことが早い復旧にもつながった。しかし、製造業を中心に得意先の再度開拓で苦勞している人たちが多く、震災も4年を経過すると、自立している人はしているが、反面、行政への依存も強くなっており、いわば、自立復興の意識が低い人も少なからず見受けられる。

このまちは本来、農業を主体としている地域だが、今は仙台のベッドタウン化が進み、農業に従事している人たちもこれからどのように進んでいけばいいのかの道筋も見いだせないでいる現状がある。今、盛んにいわれている六次産業化の意識も低い。行政も支援に本腰を入れるとともに、私自身、多賀城の農業に意欲をもって取り組んでもらえるよう、頑張っているかなければならないとの思いを強くしている。

震災の時…

大場 裕之(損害保険)

平成23年3月11日午後3時ごろ、仕事の手伝いをしている長女が次女の勤めている仙台港近くの郵便局まで郵便物を出しに出かけ、その直後、大きな揺れが来ました。東日本大震災です。自宅兼事務所に居たのは私一人、

妻は猫友達の家(貞山堀付近)、息子はどこかに遊びに行ったまま。揺れがおさまって30分位してからいつもは帰りの遅い息子が「道路が波打って向ってきた」と慌てて帰って来、妻が猫友達と猫5匹を連れて「津波警報が出た」と言って帰ってきました。残るは娘2人ですが、次女から「お姉ちゃんと一緒に近くのマンションに避難した」とメールがあったのでひと安心でした。しばらくして、次女からまたメールがきて、「お姉ちゃんが家に戻ると言っただけで、すぐに津波が来た！」後は電源が切れ音信不通。結局、長女が無事返ってきたのは3日後でした。幸いにも車2台ながされましたが、我が家から犠牲者を出すことはありませんでした。

当時、私は多賀城ロータリークラブの会長を仰せつかっておりました。停電、ガソリン不足、という状況の中で、現会長の鈴木 誠さんが車にガソリンが入っているので会員宅を回ってみようと呼びかけていただき、一緒に津波の被害が出た地域の会員宅を回ってみました。ある会員は、マンションの6階の事務所に家族10人で避難し、食料も暖房器具も無いという状態でした。でも、ロータリーの強みは異業種の集まりです。農家の会員宅に行くと米と野菜・ストーブを頂き、燃料店の会員からは灯油を頂き、6階まで階段を往復しました。

会員の皆さんの元気な顔を確認するためにも、なるべく早く一度例会をしようと4月7日には会員宅をお借りし例会を開催することが出来ました。地域社会の密接なつながりが在るからこそ、いざというとき強い絆が生まれるのです。

いち早くご支援いただきました高岡万葉クラブの皆様、また全国各地のロータリークラブの皆様から温かいご支援を頂き本当に有り難うございました。

友情の大切さを実感

鈴木 誠 (板金・資材販売)

あの「3.11東日本大震災」から4年が経ちました。当時のことは、今でも昨日の事のように思い出されます。

私は震災の時、会社の事務所にいました。当時は、小さな地震が群発していましたので、最初は「また、いつもの地震が来たなあ」くらいにしか思わず、あまり、びっくりもしませんでした。それが段々と強くなり、

電気も消えて棚の上にあったものが崩れてきました。社員もいましたし、お客様もいました。慌てて外に逃げましたが、一部の社員がまだ事務所から出てきませんでしたので、早く逃げるように促し、みんなで外から事務所を見ていました。いつもの地震はすぐ収まるんですが、この時はいつまで経っても収まらず、これからどうなるのか不安でいっぱいだったのを覚えています。

私の会社は高台にあり、津波の心配はなかったものの、周囲がどのような状況になっているのかも把握できない状況でした。地震が収まり、まずは外出している社員の安否を確認しようとしても電話は通じません。何度もかけているうちに1人ずつ連絡が取れ、家族も社員も無事なことが夜になってようやく確認でき、とりあえず安心しました。その間、ラジオなどで仙台の海岸線が津波に襲われ、数百人の死者が出ていることや火災が起きていることなど、刻々と被災状況は伝わってきましたが、その時は近親者の生存情報を把握するのに精一杯で、正直なところ、回りの状況を考える時間も余裕ありませんでした。その日は、不安な気持ちを抱えたまま自宅に帰ったことまでは覚えているものの、いつ帰ったかの記憶はありません。

私が津波の傷痕を目の当たりにしたのは2日後でした。それは、想像を絶する光景でした。この世のものとは思えない、まるで映画の世界での出来事のような気がしました。実際、その場にいた人たちはどう思ったのだろうと考えただけで、胸が痛むというよりも、自分自身どうすればいいのか何も考えられない空虚感にさいなまれたのを覚えています。その後、日が経つにつれて、事務員の自宅が地震の揺れで全壊したとか、親が亡くなったとか、親戚との連絡が取れないなど、さまざまな情報が集まるようになってきましたが、私自身、どうにも手助けできないことも多く、しばらくは情けなさが募る日々を送りました。

あれから4年。復興は未だ道半ばです。この間、私が一番感じたのは友情の大切さでした。人は誰もが1人では生きられません。今回の震災は辛いことも多かったものの、皆に生かされていること、共に生きることの大切さをあらためて認識させられた出来事でした。そして、私自身がこの震災から得た教訓は、とにかく地震がきたら逃げて生き延びるということです。命があれば、その後は何とかあります。

今回の震災は一生忘れることができませんし、また忘れてはいけない惨禍です。ここから得た教訓をしっかりと胸に刻み、今後も皆様のお力をお借りしながら、一歩ずつ進んでいきたいと思っています。これからもよろ

しくお願い致します。

東日本大震災を振り返って

加藤 千明 (味噌製造)

2011年3月11日、いつものように朝が来て、朝晩の寒さは残るものの日中は春の陽ざしを感じられる日でした。あの日私は、これから始まろうとする春の農作業の準備で、近くの知り合いの農家に打ち合わせのためにいておりました。

午後2時46分、とつぜん携帯電話の緊急着信音が鳴りひびき、それと同時に強いゆれがおそって来ました。「いつもとちがう」いままで何度か緊急着信音になった地震はありましたが、人間の直感というのでしょうか、感覚というのでしょうか、今になって思うのはそう感じたことでした。

まだ揺れのおさまらない中、いそいで家にもどって見ると、最初に目にとびこんで来たのが、孫を抱きかかえておびえて泣いている嫁の姿でした。怪我は無いとのこと。家内もすぐ来て無事を確認し、その後あたりを見渡して見ると、自宅の窓という窓のサッシは飛び散り、玄関は本宅からはずれそうになり、家の中は入れる状態ではありませんでした。そうした中で、仕事で働いていた息子達も我が家にあつまり一安心したものの、矢本に嫁いだ娘家族と連絡がとれず、不安にかられました。孫2人は、どうしているんだろうか、無事でいるんだろうかなどと、なんども電話して見るのですが繋がりません。大災害の時、安否の確認など取るようすを、時々テレビでは見ていたのですが、まさか自分の身に起こるとは、思っても見ませんでした。夜が来て、余震が来る中ますます不安がつのります。

次の日の早朝、水も引いて来たので、とにかく行って見ることにしました。いつもですと車で40分もあれば行けるのが、回り回り2時間かけてつきました。娘のアパートについて見ると、-階の部分は水につかっており、娘達家族は2階だったので、津波は大丈夫だったようです。駐車場には、車はあるのですが、娘達家族はいません。近くの人に聞いて見ると、避難所に多分避難しているかもと聞き、さっそく行って見ました。

一カ所目の避難所にはおりません。2カ所目の小学校に行ってみると、玄関先の張り紙に避難者名が張り出されており、名前がありホッとしました。各教室をさがすと、おりました。寒かった中一睡も出来なかったとのこと、

さっそく我が家につれて帰りました。いずれにしても、家族全員、怪我もなく無事だったことが、一番だったと思っております。

その後は、約1カ月ライフラインが機能しない中での生活でしたが、この時ほど農家の災害に強いことはないと思いました。昔から我が家は冬がくると、冬にそなえて各漬物、各野菜の冬囲いなどしております。今回の大震災、そのおかげで食べ物に関しては不自由しませんでした。逆に隣近所に分けてあげて感謝されました。

このことを考えると、都市の中の農業のあり方というのも、これを気に考えるべきだということも大事な、などと考えております。

私の東日本大震災の経験

丹野 五郎 (食肉販売)

平成23年3月11日午後2時46分。私は七ヶ浜健康スポーツセンターアクアリーナの2階のリラックスルームでマッサージチェアに乗って、半分居眠りをしていた。大地震、突然天井板が落下してきた。幸い首から下でしたので助かった。身動きが出来ず声を上げたらそのうち地元の叔母ちゃん達が声を張り上げて私を天井板を除き助けてくれた。大きなガラスが割れそこから逃げた。私は最後でガラスが散乱、裸足なので毛布を敷いて2階から脱出した。時間は分からない。1階に居た人達は皆逃げて誰もいなかったようだ。やっと車に乗り自宅へ急いだ。大代の自衛隊の前を過ぎ、念仏橋を渡り、「びっくり市」近くで水が出てきた。仙台湾からの津波と私が通り過ぎた後、砂押川が決壊した水だ。3分遅れたら私は車ごと流されたと思う。近くの家族が一生懸命走っているのを思い出す。笠神新橋の歩道橋を走っていた。私はやっと家に着いた。家族に迎えられ安心、両腕は傷だらけだった。

家に着きエンジンを止めた後、車は作動しなかった。塩水、砂がエンジンに入ったとの事、車はその後廃車になった。頭に天井板が落ちたら、車で帰宅途中3分遅れたら、と思うと生死を分けた一瞬、九死に一生を得た一目だった。私を助けてくれた七ヶ浜の叔母ちゃん3人、男性1人、言葉だけでもお礼と思い探してるが、今も解らず悩んでいる。蒲生の私の実家、深沼の妻の実家も流された、身内3人、友人8人犠牲になった。私の店の大きなガラスは壊れ、商品は崩れ落ち、売り物にはならなかった。

東日本大震災に大勢の人達が犠牲になった。言葉に表せない大きな悲しみであった。連日、震災により亡くなられた人達の新聞の黒枠、卦報広告「一家4人、5人」と犠牲になり残された遺族にとってこの悲しみを誰にぶっつければよいのか。言葉に表せない悲しみであった。私の身内、知人の一部の新聞卦報広告を、この記録集に掲載して震災犠牲になられた人達の弔いになる気がする。

次代のロータリアン、子供達にはロータリアン巨大地震、巨大津波に対する対策など私達の経験、体験を語り継いで欲しい。

『医療機関のネットワークづくりが急務』

関 晴 夫 (内科・婦人科)

病院の2階にある自宅にいる時に、激しい揺れに襲われた。揺れている時間が長く、家が壊れるのではないかとの不安を抱えながら、外に出て揺れが収まるのを待ち、まずは職員を帰宅させて安全確認をするよう指示した。

帰宅途中だった看護師2人は津波に襲われ、電柱にしがみついで一昼夜を過ごしたと後で聞いた時は、今回の地震の怖さをあらためて感じるとともに、何よりも2人が無事で良かったと安堵したことを思い出される。

病院内は機材や書類が散乱した状態で、カルテの整理だけで3~4日かかった。できるだけ早く診療を再開しなければならないとの思いで後片付けを急ぎ、1週間ほどで電気が復旧してすぐに診療を開始できたことは、少なからず地域に貢献できたのではないかと考えている。

今回の地震は、多くの教訓を残した。まずは、備蓄の必要性。食料を中心に、日頃から災害に備えておくことの重要性を再認識させられた。そして、的確な災害情報の伝達も大切になる。早く、正確に住民に知らせる伝達手段を構築することは行政の役割でもある。行政がいかにリーダーシップを発揮するか、その課題も突き付けられたように思う。さらに、今回の地震ほど人と人とのつながりの大切さを痛感させられたことはなかった。

そんな中で、医療に従事する者として医療機関のネットワークづくり、ドクター同士のつながりを強めていくことも今後の大きな課題になっている。災害時の地域医療をいかに確立していくか、われわれ自身が積極的に取り組んでいかなければならないと感じている。

3・11を振り返って

穀田 満 (塗装業)

平成23年3月11日、私は営業で県内を廻っていました。仙台のお客様の所を出て県北に向かっていたのですが、体調が優れず、予定を変更して多賀城に戻っていました。その時です。車が揺れ始め、揺れが激しくなり目の前の三陸道の橋桁が左右に大きく波うっているように見えました。かなり長い時間激しく揺れていたのので、途轍もない恐怖を感じたほどです。揺れが収まった瞬間、家族の安否が心配になり、電話・メールをかけまくりましたが、全くつながらず不安になりました。突然車のテレビから「仙台港に10mの津波が来ます。予想到達時刻は15時です」というニュースが流れました。あせりました。何故なら大学生の息子2人にアルバイトで現場仕事をさせていた所が、仙台港からさほど離れていなかったからです。「作業員達と避難してきてくれ」と思いながら急いで現場に向かいましたが、渋滞でなかなかたどり着けずさらにあせりました。しかし、着いてみるとあれだけの大地震のあとでも仕事を再開していたのです。私は大声で「津波が来るぞ！逃げろ！」と何回も叫びました。なんとか無事避難させましたが、あの時の事を思うと今でも背筋が寒くなります。

家に戻れば言うまでもなく、電気・ガス・水道すべてがストップし、その生活の大変さを経験しました。普段、何気なく使っているライフライン、そのありがたさを再認識し、社会に少しでも貢献したいという思いが、当時大学生だった2人の息子に今の仕事「建設関係」を選択させたのだと思います。

後日、知人・友人等たくさんの方々から心配と励ましの電話を頂いたり、食料を送って頂いたりしました。皆様からのお心遣いに感謝してもしきれない思いです。東日本大震災、千年に一度といわれる大津波、この事実は決して風化させてはなりません。後世の人々のためにも語り継がなければならないのです。

東日本大震災を体験して

大友 和 弘 (給排水衛生設備)

3月11日、私は仙台市民会館で会合に出席していました。その時、経験した事もない激しい揺れに襲われ急いで屋外に避難しました。周囲を見ればビルのガラスが割れて飛散し、道路中央のグリーンベルトには、ウェディング姿の花嫁が震えていました。私の車は停電の為駐車場から出せず知人に送って貰いました。普段は40分程度のところを2時間かかりました、帰社途中で見かける川は、小さな支流まで全て逆流しており『ただならぬ状況だ』と思いました。

当社は津波が近くまで来ましたが、幸いにも地震、津波による大きな被害はありませんでした。社員は全員無事に帰社して居りましたが、沿岸部の関係者と中々連絡が取れず心配しましたが13日に何とか無事を確認しました。

震災直後の11日の午後6時には多賀城市水道部に集合を掛けられ、翌日から応急給水活動と給水装置の修繕という復旧活動を早速開始しました。通常業務は全てキャンセルもしくは無期限の延期となりました。

そんな時、悩まされたのがガソリンの不足です、様々な伝を頼り、手を尽くしましたが手に入りませんでした。その様な中、自宅が半壊し応急修理に行った近所の農家から在庫の軽油を借りる事が出来ました。他の農家からも借りることが出来て無事に復旧活動を続けることが出来ました。改めて地域の繋がりの中で生かされていると感じて、地域の方々に感謝しました。

今回の大地震は90%の確率で来ると言われていましたが『今日、明日には来ないだろう』と悠長に考えていました。何の備えも無いまま、経験した事のない大地震、想像を超えた大津波です。慌てて当然と云えば当然ですが、目の前にやらなくてはならない事が次々と発生し、無我夢中で対処しました。自然を前にしての人間の無力さ、災害に対する知恵の無さ、いざと云う時の覚悟の無さを痛感いたしました。『自分の身は自分で守る』その事をしっかりと伝えて行きたいと思います。

復興はこれからですが、震災に際して今まで頂いた多くの支援に対し深く感謝いたします。そしてこの震災を機に、日本人が忘れかけていた人に対する優しさを取り戻し、幸せに生きる事が出来る国になる事を願います。

次代の子供たちへ

佐藤 仁一郎 (葬祭業)

2011年3月11日、会社に居て地震に遭いました。窓ガラスがガシャガシャって全部割れてしまうだろうなと思いました。テレビが揺れて壊れると情報収集に困ると思いテレビを押さえて地震のおさまりを待ちました。

当社の多賀城支店に津波が押し寄せ、現地で業務を担当していた社員が、命からがら徒歩で本社に戻ってきました。支店社員が取り残されたとのことですが、救出をと対策しましたが、近づけず不安な一夜を過ごしました。

夜明けて支店の2階に避難出来ていることが分かり安心をしました。又、避難で逃げ込んだ人たちの支援も行ったということで、本社に帰還した際、大変ご苦勞様、お疲れ様を伝えました。

被災状況も刻々と分かり、両親を喪った社員、自宅を損壊した社員がおり、大変な悲しみを現実としました。

震災で大人も子供もそれぞれが大変な苦勞を経験したと思います。あの時、これからどうなっていくのだろうかと不安状態の中で過ごしたことと思います。食糧・水・油・電気が全く無いという困難の状況の中でしたが、少しずつ地域から全国から支援の手が伸べられてきて光明が見え始めた時、前に進める勇気をいただきました。人は助け合って生きている、そういうことを実感する経験をさせていただきました。あれもこれも大変という状況でしたが、助け合い、人との繋がり大切さ、平常では出来ない経験をさせていただきました。

このような大震災を経験し、安心安全の為に、町も人も変化、変貌を遂げていこうと思います。次代を担う子供たちは、東日本大震災の正しい情報を語り伝えていただきたい。そして、人にやさしく、人の為になる、人の先頭に立ってより良き地域社会に貢献出来る人をめざして、健やかに成長されます事をご祈念いたします。

「記録集」への寄稿文

横田 芳博 (コンビニエンス・ストア)

「よく生きていたな」この言葉は震災直後、私にかけられた「あいさつ

ことば」でした。それもそのはず、発災時、私は宮城県東松島市野蒜付近にて仕事をしていたからです。命からがら1mでも1cm.でも高い場所へと懸命に逃げました。九死に一生を得たとはこのことでした。この野蒜地区はほぼ全滅状態で、今なお生きていられたのが不思議でなりません。「生かされているんだなあ」が実感です。また人生観も変わりました。それくらい衝撃的な出来事でした。

未曾有のあの大地震から早いもので、まもなく4年になります。壊滅的な被害をうけた沿岸部や間接的に物的・人的な被害を受けた内陸部で、今なお多大な困難の真只中で苦しんでいる方も多数いらっしゃいます。

しかし復旧復興に向けての歩みは着実に進みつつあります。震災以降、世の中は我々が想像している以上に「変化」し、加えて当然のことながらそれぞれが何がしかの事情を抱えています。逆にこんな混沌とした時代だからこそ次の世代へ、この大地震を語り継がなければなりません。復興再生に時間がかかるのはもちろんですが、この過去を活かして次の新たな目標に向かって「明るく前向きに生きる」ことこそが、この大地震を体験した我々の使命なのかも知れません。

東日本大震災の津波被災地となった我が多賀城市の県立多賀城高等学校に2016年度防災系専門学科(災害科学科)が新たに誕生します。20年前の阪神・淡路大震災後に神戸市に設置された高校に次ぎ、全国2例目だそうです。

ここ多賀城市には陸上自衛隊・東北地方整備局・東北学院大学工学部など、防災・減災に取り組む機関も多く存在します。また未来へ語り継ぐための施設として多賀城市は「津波ミュージアム」の設置を国に働きかけております。このような市内の豊富な地域資源を生かした防災教育を押し進め、高い意識を持った次世代のリーダーを育てていくことも急務とみたまいます。このことが亡くなった御霊に報いることと信じます。安らかにお眠りください。

今、振り返る東日本大震災

—あの教訓を次代へ語り継ぐために

菅野 智 (空調換気設備工事)

東日本大震災発生時の状況と震災から得た教訓を自分なりにまとめ、それに伴い次代を担う子供たちに伝えれば幸いです。

平成23年3月11日午後2時46分、当日私は、得意先より請け負った新築

工事の現場に社員含め5名で施工に当たっておりました。当社は空調設備の施工を業務としており、工期もなく懸命に作業をしている中、地震が発生しました。1度目の激しい揺れに襲われた後、社員に屋外退避を指示し、他職の作業員にも声を掛け、建屋外に出たところ、2度目の激しい揺れに見舞われました。その光景を見ていると今にも建物が崩壊しそうな状況で、自分を見失いそうになり、震えが走り動揺を抑えることが出来無い有様でした。

しばらくして、揺れが収まり我に返ると、周辺の住宅の屋根瓦等が崩れ落ち見るに耐え難い状況でありました。落ち着きを取り戻した頃、作業所長の指示で帰社命令が出され、現場を後にしたが、停電による信号機の停止による渋滞、道路の隆起、陥没で車をまともに走らせる事ができませんでした。現場の場所が柴田町でしたので、多賀城からの通勤は東部道路を経由して仙台空港I・Cより裏道の山間部を通り抜けるルートですが、東部道路に近づくと連れて渋滞が激しくなり、身動きがとれない中、ラジオで仙台空港に10m強の津波襲来のニュースが、報じられておりました。3時30分過ぎ頃だと記憶にあります。この時間では津波も収まっていると思い、とにかく早く事務所に戻りたい一心で空いている道路を走りますが、最初は空港トンネル付近で水没のためUターンして引き返し、裏通りを経て、イオン名取モール前で社員が、浜街道は危険だから、渋滞していても国道に戻ろうと言われ、安全を考え国道を経由することにしました。午後11時過ぎ位になんとか国道に入ることができたのですが、2キロ程の距離で7時間もかかってしまい、燃料も無くなりかけ不安が募り、最悪、車を放置し徒歩で帰ることになると思っておりました。

国道に入り少しずつ渋滞も緩和され、六丁目交差点を過ぎる頃には走行車も少なく七北田川の高砂大橋付近で又渋滞に捕まり道路を見ると、橋前後の道路が地震の影響で陥没しており、やっと走行できる状態でありました。

多賀城に入ると津波の曳きも残っており、停電のため街路灯も消え、暗闇で全く被災状況が掴めず迂回に、迂回を重ね事務所にたどり着いたのが午前1時30分を過ぎた頃だと記憶しております。事務所の被災状況も解らずただただ、全員が無事戻って来られたことに対し安堵感でいっぱいでありました。

次の日事務所に来てみると、さほど被害は無かったのですが、市内は津波によりこの世のものとは思えないくらいの状態でありました。日鉦JXの火災により石油タンクが爆発する恐れのために、3日程半径2k m.に渡り立

ち入り禁止措置が取られたため事務所に行って片付けすることもできず、ただただ戸惑うばかりで、自分の無能さに気づきました。

ライフラインが復旧するまで10日程かかり、その間休業を余儀なくされ、毎日が飲料水と、食料の確保に追われる日々でありました。

それからは復旧工事に追われる日々が続きました。その中で、当時は社会奉仕委員長を務めておりましたので、各クラブからの支援の対応や、避難所への炊き出し等行っていきました。慌ただしく半年が経過する中で、クラブメンバーや周囲の声が聞こえる中で、自分は会社も自宅も震災被害が少ない中でただ10日間無駄に過ごした悔やむ思いと、周囲に対し何かできたのではないかという後悔の気持ちでありました。人間、窮地に追い込まれると自分のことしか見えなくなる。それをつくづく感じさせられましたし、一日でも早く被災者に手を差し伸べる勇気が必要だと感じた次第であります。

この震災で多くの子供たちが悲憤な思いを体験し、個々にこれからの人生にどのように役立てるのか、又どのように生かしていくのか、私たちが手を差し伸べながら導いていかなければならないのではないのでしょうか。

ライフラインが途切れ辛抱、我慢の10日間、避難所生活での挨拶など今までになかったことを子供なりに気を遣い耐えてきたと思います。しかしながら、この様な悲憤な状況のもとでは自分だけが可愛くなり、自分のことは考えても、他人のことは忘れがちであると思います。ともすれば私心に走り、私利私欲が先に立ってしまいがちです。大人がそうであるように。ある場合には、自己を捨て、まず相手のことを思ってみる。自己を捨てることによってまず相手が生きる。その相手が生きて、自己も又自ずと生きるようになる。互いに生かしあってそこから本当の絆が生まれ、ともに成長していけるのではないだろうか。

子供たちがこれからの人生の中で、豊かな社会生活の繁栄に携わるため、お互いを生かし合う謙虚な気持ちを育んでもらいたいと考えております。そのために我々ロ[タリアンが提唱する青少年健全育成の奉仕活動が、一人でも多くの子供たちに、先の震災を忘れず強い絆を育んでいけるよう努めていかなければなりません。

「私は何も出来ませんでした」

宮城 順 (建築)

2011年3月11日金曜日、午前中はよく晴れて過ごしやすい日だったと記憶しています。所用を済ませて会社に戻り、午後の仕事を済ませようと机に向かった時、突然携帯の緊急地震速報アラームが鳴り、直後に大きく建物が揺れ始めました。

会社の3階から見える家の屋根瓦が崩れるのと駐車場の車が大きくバウンドする光景が見えた記憶しか残っていません。気が付くと自分の車の中でテレビの地震情報を見ていました、そこに映っていたのは見慣れた七ヶ浜の海岸に押し寄せる津波が、家と車を押し流している光景です。

これは！と身の危険を感じて出て来たばかりの会社に戻る際、国道で渋滞中の車にも声をかけましたが、運転者はハンドルを握ったまま振り向きもしません。自分も建物の階段を10段程登り、ふと音がしたので振り返った瞬間に見えたのは、路上を押し寄せる黒い水と流されるコンテナや車両の姿です。アッという間に国道の車が流されるのを映画のシーンを見ているように見ていました。ついさっき声掛けした車も目の前を流れて行きます。慌てて2階に上がり、思わず窓から何枚かの写真を撮りました。

その後の事はいろいろなメディアが伝えているのでご存知の事と思います。思いもよらない事態に遭遇し、目の前で助けを求められでも身の安全を考えて、積極的に津波の流れに入って助けには行けなかった。今思うとその時助けることが出来たかもしれない己と、自己の安全を図る己の2人が存在したのです。どちらも本音の自分ですが、このような自問をした人は数多く居たと思います。自分も多くの人たちと共に、決して決められない答を求め続ける事に成るのでしょね。

あの日から3年10ヶ月が過ぎて

阿部 新康 (重機運搬)

あの日の午前中は、天気も良く3月末日が工期の「貞山運河水門」の現場に安全パトロールへ行き、昼に会社に戻り、仕入業者と商談し、午後2時頃デスクに就きました。

2時46分、突然大地震が発生し、事務所の外に飛び出してみると、今まで経験したこともない甚だしい揺れで、異常に長く続きました。

クレーンの会社なので、場内には大きい鉄板が敷き詰めてありましたが、溶接留めしているにも関わらず「パタンパタン」と踊っており、駐車してあった大型トラックが3台大きく前後に揺れていました。

工業団地を遠くに見ると、弊社の顧客であります「JX日鉱日石エネルギー(株)仙台製油所」の煙突より「バーン」と音と共に火の手があがり、これは大変と思いながら携帯ワンゼグを見ると津波警報発令「仙台港6m・石巻港4m」と警報が鳴りました。

事務所に入り、貴重品・重要書類をカバンに入れながら、事務所に居た社員に「逃げろ」と指示致しました。弊社の事務所とモータープールは仙台港背後地に位置しており、岸壁より300mしか離れておらず、多賀城市との境界にあります。10分位した時警報が変わり「仙台港津波10m予測」の通知があり、急いで社員を避難させようと大声で『逃げろ！！』。

自分も産業道路、国道必号線(内陸部側)に行く道は、すでに渋滞で進めず、逆に仙台港側に向い裏道から内陸部へ逃げました。事務員3名は渋滞で動けず、とっきの機転で車を降りて走り、300m先のイオン多賀城店の屋上へ逃げ切り、10分後津波が押し寄せ、自分達の職場が津波にのまれるという信じられない光景を、急に天候が雪にかわった寒い中で拒然と見ていたそうです。

結果的には社員は各現場で作業中でしたが、全員無事でした。只、残念なことに、社員の家族が3名、私の家内と4名の尊い命が失われました。

被害は社有のクレーン車9台、大型ユニック付トラック3台、4tユニック車5台、通勤営業車11台、社員自家用車30数台、社屋、倉庫、クレーン部材、資材センターが流失し5億円強の損害を被りました。

会社の存在も危ぶまれ、一時は、役員にて廃業まで思い及びましたが、社員達が「我々も頑張ります。何とか会社を続けて下さい。」との声に背中を押され、今では、社員もクレーンも倍増し現在に至っております。

1人も退社する事無く続けてこられたのも、役員・社員が一丸となって、地域の早い復旧・復興を願い頑張れたのが一因と思います。

又、何と云っても、高岡万葉RC様はじめ全国のロータリアンの皆様のご支援と友情があったからこそ、我々の笑顔が戻ったのであります。各団体や国・県・市町村、又銀行団のご支援に感謝いたしまして「あの日」を振り返りたく思います。皆様の益々のご発展、ご健勝をお祈りいたします。

ありがとうロータリーの絆！

『助け合うことの大切さを後世に』

加藤 明 (産廃処理業)

実家に遊びに来ていた娘が帰る日、仙台駅に送って帰る途中、あの地震が起きた。取るものも取り敢えず会社に行くと、誰もいない。日頃、定期的に実施していた避難訓練で、何かあったら多賀城文化センターに避難するよう申し合わせていたことが幸いし、社員全員が無事、避難していた。その無事な姿を見た時の安堵感は、今も忘れることができない。

到達した津波は5m。会社を丸呑みし、機械も何もすべて流された。その代わりといっっては何だが、津波が引いた後には乗用車が70～80台、トラック20数台が工場内に流れ着いていた。

1週間が過ぎたころから、社員が集まってきて後片付けが始まった。きれいに片付いたら従業員に退職金を払って会社を畳むつもりでいたが、設備の解体を依頼する仕事が次から次へと舞い込み、辞めるに辞められない状況に。会社はすべて流されてしまったが、社員という財産が残ったことに感謝し、再出発を決心して4年という月日が流れた。その間、苦労もあったが、充実した日々を過ごすことができたと思っている。

この大きな災害を経験し、これまで以上に日頃からの避難訓練の大切さを自覚した。さらに、会社のある辺りは元々、湿地帯で、液状化の心配もあったことから万一に備えて保険に入っていたが、それが今回、会社を再建する上で大いに役立ったことから、保険の重要性も再認識した次第である。

今回、多賀城ロータリーの会員の中には直接、被害に遭われた人も多く、これまで自分のことだけで精一杯だったのではないかと思う。そんな中でも、避難所で炊き出しをするなど、ボランティア活動を熱心に進めた人も多かった。こうした状況に見るにつけ、人と人とのつながりがいかに大切かをあらためて感じるとともに、助け合うことの大切さを震災経験者の1人として後世に伝えていきたいと思っている。

初めての津波

引地 辰 男 (杭打抜工事業)

■東日本太平洋沖地震発生時

3月11日、三陸道利府IC付近を福島県いわき市の会合へ車で移動中でした。最初は何か変な感じで助手席に乗り、見慣れた周りの景色の変動に地震かなと思いつつ走行中に何の支障も感じず、いく分かの間に思いもよらぬ、大地の異変に戸惑い、あわてて車を停車させるのが精いっぱいのことでした。

その間携帯電話のアラームが鳴り響き、何が何だか分かりませんでした。あとで分かった事でしたが、はじめて耳にしたアラームは、地震を知らせる警報と知りました。いかに自分が、災害に無頓着なのか思い知らされ、地震の揺れともに恐怖に変わり、ただなすすべもありませんでした。

■震災を経験しての感想、震災から得た経験

昭和27年生まれの私は、幾度かの地震に遭い、小学生の時の新潟沖地震、その後は宮城沖地震等の幾度かの地震で経験した揺れとは比較に出来ない異常なものと感じました。電光掲示板をささえる、鋼管支柱が弓なりに揺れ、道路が波のように歪んでいました。利府中ICで出され、どこへ向かうにも、道路は各所で寸断され、渋滞の中、進める方へ走るしかありません。電柱が倒れ電線が道路をふさぎ、どこの道を通ったのか分からないまま何とか自宅に夕方遅く着きました。

東日本太平洋沖地震は、これほどの広範囲に災害をもたらし、ライフラインも機能しない中、寒さと、暗闇の周りで、自分の周りで何が起きているのか知るすべのないまま幾日か過ぎ去り、生まれて初めて日にする津波の姿を目のあたりにした時、ただただ信じられない目の前の光景に、この国の言い伝えで聞いていた、あまりの現実の出来事に直面し分からないまま、会社に向かいましたが、場所さえ確認できませんでした。幸いに私の家族は全員無事で、大勢の犠牲者がでた事は後日知ることになりました。その中には友達、親せき、そして家族、大好きな海のあまりにも自然の異変の残虐さに、あの津波さえ無ければと幾度も、何度も、何も出来ない自分の力の無さを知りました。

現在、私も震災直後、世界中の皆様に使われたことに感謝し、毎日災害地の復興に日夜頑張っています、まだまだ遠い道のりですが。

■次代を担う子供たちに託すメッセージ

あの地震から数日後、全国、海外から救援、救助に大勢の人の支援をいただき必死に生活してきました。近所、友達、すべての人にお互いに支えられ、世の中の温かさに感動致しました、いつかは恩返しができる様、私も必死に復興に携わっています。元の生活に確実に、戻れるまで、幾年かかるのか分かりませんが、皆さんで助け合い強く生きましょう。

出だしの文面に迷いましたが優しく問いかけるか、現実を問いかけるかでも、精一杯生きて生きることが、家族、友達、皆さんの思いに忘えられる事と思います、初めての経験のない多くの辛いことに立ち向かい今、周りに居る大切な人達と一緒に自分の将来に前進して下さい。

最後になりますが、大地震の後には、津波が必ず来ます。自分を大切に高台に避難を優先してください。これからの未来を担う皆さんの活躍に心から応援いたします。

「笑顔になって…」

佐藤 徳子 (室内装飾業)

もうすぐ、あの忌まわしい震災から4年を迎えます。ペットと一緒に暮らしてる我が家では、災害復興住宅の申込みも出来ないまま、いまだに仮設扱いのみなしアパートで仮住まいをしています。

震災当日、私は孫のお迎えの為幼稚園にいました。激しい揺れと共に園舎内の窓ガラスが割れ始め子供たちの悲鳴やら泣き叫ぶ声…素早い先生方と保護者の協力により大きなケガ人は出ませんでした。その後、我が家のペット達も気になり自宅によってみるとマンションのドアが曲がって開くません。近所の人に、手伝ってもらい中に入ると足の踏み場もないくらい物が倒れてグシャグシャ、啞然とする私と孫、その時、「お母さん、助けて～、動けない～、ペット達は無事だよ～。」と子供の声。どうやって助けていただいたのかあまり覚えてませんが我が子とペット達が救出された時には、足の震えが止まらなかった事を覚えています。

それから、事務所に戻り、スタッフの無事を確認取っていると外が騒がしい。外を見ると、産業道路の方から「津波が来る」「避難しないと危ない」と言って、駆け足で大勢の人達が逃げてくるではありませんか?。あっ

という間に避難所の小学校は溢れ出しました。産業道路より国道を挟んで700m位にある事務所なので、まさかここまで来ないでしょうと思いながら、様子を見てたら道路に水が流れ始めてきました。みんなを連れて避難しなくては、利府の高台に車で移動しようと思っても大渋滞で動かない。娘の判断で、高台にある仙台オープン病院の駐車場に行き、一晩中車の中で過ごしました。翌日からは、生活が一転してしまい恐ろしい状況でした。

この震災を通して自分達の経験を色々な形で語り続け震災を忘れないよう、そして子供達には、命の尊さや人を思いやる気持ちを大事にしてほしいと思います。

また、大切な人との突然の別れに出会った皆さんには、なかなか現実を受け止めたくないことだと思いますが、立ち直る時間は、人さまごまでず(私自身も六年前に、突然主人を亡くしているひとりだから…)。

頑張らなくていいのですよ。悲しい時は、自分の気持ちに正直になって泣いて下さい。少しは、心が軽くなるはずです。次の日には、ちょっぴり元気になるかもしれません。笑顔を見せましょう…。

笑顔は、自分も周りも元気になるくすりだから…。

震災と私

大久保美津子(飲食サービス業)

4年前のあの日。日常的なことが日常的ではなくなった日。ライフラインも含めて日課と時間の流れが一変した日、3・11日東日本大震災。

“その時”私は自宅に一人で居て、残り少なくなった灯油を買いに出掛けようとしていたその瞬間だった。(あっ、地震だ!)今まで聞いた事も無いような大きな地響きと同時に揺れがどんどん強くなり、パンッ!という音と共に電気が消え、あちこちからガラス等の割れ落ちる音が…。(とうとう来たか、宮城県沖地震)と思いながらテーブルに掴まり耐えていたが、揺れはますます強くなり(これは思っていたよりも大きいぞ)と思い始めた。少し揺れが落ち着いたかと思った瞬間、今度は大きく縦揺れに変わり、家中の物が雪崩の如く一瞬にして落下。床はめちゃくちゃに……。外に逃げようと玄関やベランダ方向に足を向けようとしたが、散乱したものが邪魔をする。しかも足がすくんでどうにもならない。

とっさに頭に浮かんだのが、阪神淡路大震災の建物倒壊の映像だった。

(ああ、私はここで瓦礫の下になって死ぬかもしれない…。もうダメだ!)
世の中がひっくり返る程の揺れの中、大きな声で「死なねえぞお!!!」
と叫びながらテーブルの下に頭を入れた。(そうだ、ラジオ!)と思い、目に入
ったラジオに手を伸ばしたが、落下の衝撃で乾電池が飛び出していて聞
けない状態。(何んてこった、ツイてない)

かなり長く感じた揺れが少しずつ収まってきた。(ああ、命だけは助かっ
た!)まだ心臓がパクパクしているが、とりあえず東京に住む息子へ震えが
収まらない手で携帯電話の災害用伝言ダイヤルに無事だという旨の登録を
済ませた。娘に電話をするもつながらず。次はすぐ近くに住んでいる実家
の母は大丈夫かと、メチャクチャになった家の中を横目に見ながら車に乗
り、実家へ向かった。母は留守だった。おそらく日常的に通っている病院
だろうが、帰りはスーパーに寄り買物をして来る事が多く、今日はどこの
スーパーだろう?。塩釜マリゲート方向にあるスーパーかな?。などと思
い、車で迎えに行ってみようと思ったが、何故か足が向かない!。後日、
塩釜マリゲート辺りは津波で大変な被害にあったと聞き、その時迷わず
向かっていたら私も津波に巻き込まれていたかもしれないと思うとゾッと
した。

雪が降り始めていた。(なんでこんな時に雪なんて…。)変に静寂の時間だ
った。母は4時半頃タクシーにて帰宅し、ホツと安心。聞けば、その日は塩
釜駅近くのスーパーに寄っていたとの事。私が心配したのは反対方向だ
ったので、やはり行かなくて正解だった。しかし、よくこんな時にタクシ
ーが拾えたものだと、87歳の婆さんの運の強さに苦笑いだった。

娘の安否は、勤務先から帰宅するのを待つしかなかった。娘とは日頃か
ら防災として、地震の際には指定避難所になっている近くの塩釜市体育館
に向かう事、と決めであった。しかし、帰って来るかもしれないと思い自
宅で待っていた私と、とりあえず帰ってみようとして自宅に帰って来た娘。お
互いに無事だったことを喜び合ったが、あの取り決めは何だったのか!?
いづれにしても塩釜市体育館は人で溢れかえり入れず、その夜は2人で車に
毛布を持ち込み車中泊をしたが、ガソリンが半分しかなく、朝までエンジ
ンのON・OFFを繰り返しながら暖をとった。ラジオから流れてくる沿岸地
域の大惨事を心配しながら、(これからどうなるんだろう…?) 余震も続いて
おり、不安でいっぱいだった。夜空に目を向けると、満天の星が目映い、
ばかりにキラキラと光っている。街の灯りが何ひとつ無いというものもある
のだろうが、皮肉なものだ。隣の助手席では、娘がスヤスヤと眠っている(こ
んな時になんて幸せな奴だ…)

翌日、炊き出しの情報があり塩釜市体育館へ向かったが、自宅避難者には配れないとの事。ご飯を食べることは諦めた。自宅には万が一の為に、石油ストーブとミネラルウォーターのペットボトル2ケースの買い置きをしておいたので、それからの3週間余り、インスタントコーヒーと袋菓子で暮らすことができた。

私の苦悩はここからだった。震災から2日後に何とか多賀城に入ることができたが、お店のある桜木はヘドロ臭が充満し、あちらこちらに車や瓦礫が重なり合い、“津波2メートル”の爪痕をまざまざと見せつけられた。何とかお店に辿り着いたものの、シャッターは開かず。しかしこの状況からして、店内がどのようなになっているのかは容易に想像できた。茫然自失。しばらく立ち竦んで動けない。(お店はもうダメかもしれない…明日からどうしよう)。

それからは日の出とともに起きて、日没とともに服を着たまま眠る毎日。日中はガソリンスタンドやスーパーに何時間も並ぶ生活。水汲みに関しては娘が頑張ってくれて、若い人のパワーは頼もしい限りだった。

しかし時が経つにつれて商売の事が頭から離れず、心が折れそうだった。電話が通じるようになり、東京に住んでいる息子に不安な気持ちを話すと、「お店の事はあまり考えないで。その内に行政も動くと思うし、お店がもし再開できなくてもお母さん一人ぐらい俺が食べさせてあげるから心配しなくていい」と言ってくれた。涙がこぼれた。この息子の言葉で、私は少しの勇気を貰い、(子供達には迷惑かけてはいけない)という思いにかられた。

そのうちに、全国各地の知人・友人から支援物資が次々と届けられ、沢山の元気をいただいた。こうして応援して下さる人たちがいるのに、落ち込んでばかりはいられない。もっと大変な方や、犠牲になられた方が沢山いるというのに(私は何をやっているんだろう)何もできていない自分がいた。(とにかく動き出そう日)

お店の瓦礫処理に着手したのが地震から2週間後で、JC時代の仲間達、従業員とその家族の方、常連のお客様にお手伝いいただき、お店の中はキレイサッパリと雑巾一枚まで残らず捨てる事ができた。ヘドロまみれの作業に、本当に頭の下がる思いだった。最終的に建物は取り壊しに…。

店舗探しを始めたが、当然桜木には物件も少なく途方に暮れていたところ、今のビルのオーナーがJC仲間でもあったことで快く貸して頂けることになり、これもまた感謝…。ありがたい…。

こうして、まだヘドロ臭の残る中ではあったが、震災から3ヵ月後の6月8日に、思ったよりも早くお店を再開することができた。オープンの時には、

お世話になった仲間達や同級生の皆さんが駆けつけてくれて、お祝いしていただいた。写真屋を営んでいる同級生はアルバムを作ってくた。“美津子ガンバレ”のメッセージ入りだった。

この震災から、大切な事を沢山学びました。人は1人では生きていけないという事も。みんな、本当にありがとう。

これからは私ができる事から少しずつ恩返ししていけたらと、選択肢の一つとして多賀城RCの仲間にも入れて頂きました。(頑張ろうの決意を込めて)。

東北の子供達はこの震災で沢山の事を学び、精神的に成長したと聞いております。この先、この様な大災害が無い事を祈りますが、もしもの時には、体験者として被災地の為に行動を起こし、活動できる人として成長してほしい。そしてまた、それを次の世代に伝えていってくれる事を心から願っております。(私の反省からです)。

震災に学ぶ

赤坂 泰子 (廃棄物処理業)

空が高く、広く、倉庫の無くなった仙台港は数十年前にタイムスリップしたようでした。沢山の電柱は、鉄筋だけになっており、多くのトラックや重機は鉄くずと化していました。電線や電柱が一本も無くなるとこんなにも広く空を感じるものかと、毎日天を仰いでいたものです。

スロバキアから来た戦場カメラマンは、戦場よりも酷い景色だと言っておりました。

ある日突然、事態が一変する出来事が起きる場合があると言います。それがわが身にかかることがあるとは思いません。まして、一瞬で全てを失うことがあるとは想像もしないでしょう。

あの日私達は、高台から我が社が流され、壊されていくのを見ておりました。まるで、おもちゃの様に壊れて波に消えてゆきました。

避難先から社員達と別れる時に「重機を一台手配できたら復旧作業を始めます。それまでは自宅も大変でしょうからいつでも出社できるよう、待機しておいてください」そう言って別れてから二週間後、復旧作業を開始しました。社員達は全壊の会社を目にしていたので、復旧は困難だと思っていたそうです。私は、ゼロからのスタートだから必ず復旧できると信じ、

今までと同じ復旧ではなく、バージョンアップしたプラントの設計を考えておりました。ありがたいことに、あの混乱と困難の中、困難の中瓦礫と化した当社を去る社員は一人もおらず、皆、会社のために遠い道を通ってくれました。このスタッフとお客様の温かい想いにより当社は再建することができたのです。

人は皆、それぞれに与えられる試練が違います。どんなに困難と思われても、その人のゆるがない強い信念が道を開いてゆくのです。強い信念は自信となり、その人の顔に輝きを放ってゆくのではないのでしょうか。

これからも、必要とされる会社と笑顔溢れる人材育成に努めてゆきたいと思います。

「今、振り返る東日本大震災」 —あの教訓を次代に語り継ぐために

小向 裕子 (建築板金業)

早いもので4年の月日が経とうとしています。

震災発生時、社屋3階の事務所にいました。この頃やけに地震が頻繁に起きていたのですぐに収まると思っていましたが、揺れが激しく長時間に渡りました。

入口ドアを社員が押えに走ってきてくれて安全確保ができました。廊下に出てみると、3階、2階のガラスブロックが全面落下して、下駐車場にあった車2台を押しつぶしていました。その時点で車の避難は無理と諦め、社員の安否確認を急ぎました。携帯電話は勿論繋がらないしメールでやり取りをし、家電話も繋がりにくい状態でしたが、幸いにも現場が近かったので事務所に戻って来た者が数人おりました。片づけに屋外に出たら産業道路は大渋滞でした。

タンクローリーの運転手さんが10m位の津波が来るらしいから避難したほうがいいですよと言ってくれました。その情報がなければ事務所に留まっていたかもしれません。3時半くらいだったでしょうか。それから社員と一緒に避難所であるソニー体育館目指して歩きました。慌てていたせいもあり、携帯電話を見つけられず、とにかく貴重品を持って向かいました。とにかく雪もちらついていて寒さと(好奇心)であまり緊張感はなかったと後で思いました。

ソニーの公園まで着いたときに、マンホールの蓋が水圧で浮き上がり、

側溝の水が半端ない音と量で溢れかえっています。急いで建物を目指していると、公園内に桜木保育園の園児たちが松の木の根元にブルーシート1トを敷いて座っているではありませんか！。社員たちは子供を抱え、建物の中に移動させ、その時は足首までの水位でしたが、あっという間に胸くらいの高さまで来てしまいました

ずぶぬれになりながらも、助けた社員には頭が下がります。流れも速くなっていて手を差し伸べたけど届かなかったと、後で聞き、暫くの間自責の念に駆られたそうです。

色んな情報が錯綜している中、ワンセグ、ラジオから被害の大きさが映し出されています。仙台空港、荒浜海岸では200～300の遺体が確認されたとか、現実離れしています。夕方から夜にかけてかなり冷え込んで雪もちらついています。

屋上に上がってみると、4、5か所で火災が起きています。屋根の上に避難してる人もいます。とにかく暖を取り、トイレ確保とソニーさんには大変申し訳なかったのですが、ロッカーを開けさせていただき、備品をお借りしました。アルミの敷物、のど飴、ジャンパー、長靴、毛布などとても助かりました。

また、ソニーさんには安全部班があって、次の日には飲食料、充電器とか運んできてくれて、逃げた場所が良かったのかと感謝、感謝でした。

園児たちは、誰一人泣く子もなく、園長先生のお話をよく聞いて静かに休んでいました。自分の孫のような2歳から5歳くらい10数名だったと思います。とても頑張ったとほめてあげたいです。

丸一日ソニーさんにお世話になり、夕方自衛隊の方々がトラックで迎えに来てくれました。まだ水も引かない状態だったので、社員たちが足にビニール袋を付け、ひざ上まで汚水に浸かり、栈橋を作ってくれ無事移動できました。

自衛隊のトラックに揺られながら、産業道路を通ったとき、戦争経験はないですが、色の無い街、壊れた街を失望感で見た状況が忘れられません。

自衛隊舎では人の多さに、びっくりしました。座ってられる場所も確保するのが難しい中、今度は火災の恐怖におののきました。爆発音と火の勢いが今にもこちらに届きそうでしたが、ここでも食料を頂戴し、さすがに寝ることはできませんでした。

翌朝、水がだいぶ引いたので、徒歩で会社まで行きました。無残な姿で社屋は残っていました。あーこれまでだな！って覚悟しました。

水も出ず、電気もない、片づけが出来ない等、その場で社員たちと解散しました。帰宅方法は、ほとんど徒歩です。

我が家はどうなっているんだろう?と家路を急ぎました。45号線まで来たら別世界でした。天と地そのくらい明暗が分かれていました。

生協の前には長蛇の列、何かと思ったら買い出しの行列、夢を見ているようでした。泥だらけのダウン、長靴姿の私。並んでいる人はごく普通の恰好!津波が来ない地区は天国なんだと思いました。

家には老犬が1匹で待っていると急ぎました。もともと歩くのがトボトボだったし、こたつが大好きな犬なので寒くて大丈夫かと名前を呼んだら、いました。生きていました。16歳4か月の大型犬、私の支えてになってくれた愛犬ラスティ!です。寒くて震えていましたが、待っててくれました。大泣きです。それから2日後、ラスティは暖かいこたつに入りながら、長女とも合流し、寿命を全うしました。

3月15日没。ありがとうラスティ。

私の携帯が繋がらなかったこともあり、長女は県警に行方不明者に登録したと後で県警からの連絡で知りました。家族間、友人間の連絡は災害ダイヤル等。日頃から行っていたら大騒ぎにならずに済んだと思い、反省しています。その後、1年間は会社社屋復旧が進まず、自宅下を事務所に会社再建をしました。

栄地区は電気・水道など復旧がかなり遅れていて、作業にも影響が出ましたが、皆さんに物資提供・お心付を頂戴し、今までやって来れました。

自然の怖さ、恐ろしさを十分に経験し、人間の生きる力の壮大さ、苦境に立つと頑張れる能力を持ち合わせているという事、一人ではできないことも力を合わせれば何倍にもなって強固な団結力ができる。一人では生きていけないんだと、皆と共に生かされていることを実感した震災でした。

震災後も各地で自然災害が多発しています。備えあれば憂いなし!

教訓です。

「今、振り返る東日本大震災」

松村 勇人 (石油精製)

あの日の午後3時過ぎ、福岡に単身赴任中で鹿児島取引先社長と商談中であつた私の携帯に東京の妻から突然、メールが届きました。「今、もの

凄い地震があった」と書かれており、すぐさま社長室でテレビをつけましたが、飛び込んでくる映像はかつて見たことのない激しい揺れを映したものであり、私は福岡へ直ちに引き返しました。まずは、このように、東日本大震災を実際に経験していない私が寄稿させて頂くことをお許し下さい。

あれから3年10カ月、手元に多賀城市にて刊行された「平成23年3月11日 あの日を忘れない東日本大震災の記録」という記録誌があります。ページを捲る毎に驚愕の連続であり、当時の報道や未だ各所に残る被災現場と併せて、深く心に刻み込む次第であります。

改めまして、大震災でお亡くなりになられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様にお見舞いを申し上げます。また、弊社JX日鉱日石エネルギー仙台製油所が大火災を引き起こすなどして、地域の皆様に大変なご心配とご迷惑をお掛けしたことにつきましては、心よりお詫びを申し上げますとともに、幾多の艱難辛苦を乗り越えて多賀城の復興復旧に尽力されてこられた地域の皆様に敬意と感謝を申し上げます。

さて、この約20年来、大地震・地球温暖化・異常気象・火山活動など天変地異の事象が頻発し、更には原発関連をはじめとするエネルギー問題など、これから21世紀を生き抜く子供達を取り巻く環境は、まさに難問山積と言わざるを得ません。明日の日本や世界を担う子供達にとっては、自ら体験し、また語り継いでいかれる大震災の様々な教訓や知恵は、大自然への畏敬のみならず、英知や人間性、そして絆を更に育むものになると確信してやみません。

最後になりますが、ロータリー精神のもと、個人として、また地域で共生をさせて頂いている企業人として、微力ながら従前にも増して行動していくことをお誓いし、加えて子供達の健やかなご成長と多賀城地域の益々のご発展を祈念申し上げて、結びとさせて頂きます。

「今、振り返る東日本大震災」

—あの教訓を時代へ語り継ぐために

芦澤 卓也(接骨院)

平成23年3月11日、午後2時46分。午後の診療が始まって間もなく、三陸沖を震源とするM9・0、最大震度7という、かつて経験したことのないあまりにも激しい揺れに「これはただごとではない」と直感しました。ビ

ルが倒壊して瓦礫の下敷きになるのではなどと考えているうちに強く長い揺れが収まりました。我に返り患者さんとスタッフの無事を確認してから、停電で開かなくなった駐車場のゲートを急いで取り外し、患者さんたちを避難させた後、スタッフ達に高台に避難してそこで待機しているよう指示を出し、近所に住む高齢で1人暮らしの患者さん宅へ車を走らせ2名の患者さんを乗せ高台に避難しました。

大津波警報が鳴り響き、小雪が舞う中で、小学校から帰宅していない子供達の安否、デイサービスに行った義母の安否が気がかりでしたが電話は通じません。この辺はチリ地震の時にも津波で被災していることに加え、津波が到達した地域の信じられないような惨状がラジオから流れていたのので、今動くことは賢明ではないと自分に言い聞かせその場にとどまりました。相変わらず大津波警報が鳴り響くなか、不意にその場にいた誰かが「津波が来た」と叫びました。塩釜港の方角へ目をやると黒い濁流が押し寄せてくるのが見えました。

しばらくして水が引き高台から下りて目の当りにした光景に啞然としました。いたるところに車が横たわり、或は重なり、港から流れ着いた船や瓦礫が散乱し、海底に堆積していたヘドロで一面が真っ黒くおおわれていました。先ほど迎えに行った患者さんの自宅兼店舗もシャッターがめくりあがり店舗の中が滅茶苦茶になり、店の前にはどこからか流れ着いた車がひっくり返っているというありさまでした。安否のわからない子供達のことを気になり港とは反対方向の小学校に自転車を走らせました。水没した45号線を横切り小学校に着き、停電で薄暗く、避難住民と子供達とで混み合ってる体育館の中から2人の子供を探し出し、担任の先生に挨拶をし、家に連れ帰りました。

大津波警報がいつの間にか鳴りやみ、あたりが暗くなり気温も下がる中で小学校の体育館の混乱ぶりを考えると、高齢の患者さんや脳血管障害の後遺症がある義父、飼育している5頭の犬を連れての避難は困難でした。

被災を免れた自宅に患者さんとスタッフ達、私の家族で一夜を過ごすことにしました。幸いなことに石油ストーブと灯油は充分にあったので寒さはしのげました。ろうそくを数本灯しましたが思ったほど明るくならず、大きな余震が頻繁におこる中、各地の惨状を伝えるラジオに耳を傾けながら今後のことについて皆で話し合いました。

次の日の朝、食料や水を調達できないかと外に出てみると道路はいたるところ冠水、陥没し電柱や信号機はなぎ倒され、おびただしい量の瓦礫がうず高く積み上げられていました。近所のスーパーやコンビニ、商店は軒

並み被災、店の中は瓦礫とヘドロで滅茶苦茶になり中には車が突っ込んでいるところもあって、それどころではないということがすぐに解かりました。

本塩釜駅に行ってみると構内は巨大な洗濯機で攪拌したかのような無残な状態で復旧には相当の時間を要することが素人目にも明らかでした。

私の治療室はビルの2階であったため被害は免れたものの、1階のテナントは全滅でした。

瓦礫やヘドロをかたづけていると患者さんが来院しました。電気がつかない寒く薄暗い治療室で応急処置を済ませると、その後も処置が必要な患者さんの来院があり対応に追われました。

数日すると給水車が来るようになりましたが、依然としてライフラインの復旧の目途は立たず、ガソリンスタンドは長蛇の列。何時間も並び100しか給油できないといった状況が続きました。道路、鉄道、空港、港、すべての輸送経路が寸断され、被災地は孤立しました。現代社会はこのような非常事態には脆弱で、数日間ライフラインが滞っただけで人間の生命がただちに脅かされるということを身をもって思い知りました。

また、福島原発の放射能に対する情報が錯綜する中で憶測や風説が流れ、子供達の被爆について漠然とした不安を覚えました。

4月7日深夜11時32分頃、患者さん、スタッフ達と我が家での避難生活は続いていました。被災地は少しずつ復旧復興に向けて皆が立ち上がろうとしていたころでした。宮城県沖でM7・4、震度6弱の余震が発生しました。津波警報が発令され、懐中電灯片手に皆で一目散に高台を目指しました。近所の人達も車を猛スピードで高台に走らせてきました。高台にある月極駐車場はあっという間に車で埋め尽くされました。

結局、多少の潮位の変化はあったようでしたが大事には至りませんでした。しかし、ようやく復旧した電気、水道が止まり、家具や家屋の倒壊等の被害で被災地の人々の精神的な打撃はこのほか大きく、重苦しい空気が漂いました。

あれから4年がたとうとしています。いまだに震災遺構を残すか否か、自動車教習所が生徒を高台に避難させなかったとして賠償命令が下る、原発問題等、震災関連のニュースがマスコミに流れない日はありません。しかし時間の経過とともに震災の記憶が風化してきていることも確かです。

東日本大震災の教訓として、次代を担う子供たちに伝えたいことは、災害大国日本に住む限り、いつどこで災害に巻き込まれ、命が危険にさらされるとも限らない状況にあることを忘れずに、常に準備を怠らない。避難

は迅速に行う。特に津波が予想されるときは、「津波てんでんこ」・「命てんでんこ」。直訳すると、それぞれ「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台に逃げろ」、「自分の命は自分で守れ」ということになります。他人にかまわず逃げろという、ややショッキングなメッセージ性が強調され、利己主義だと誤解するかもしれませんが、そうではありません。「自分の命は自分で守る」ことだけではなく「自分達の地域は自分達で守る」という意味も込めてあります。緊急時に災害弱者(子供、老人)を手助けする方法などは、地域であらかじめ話し合っておきます。あらかじめ互いの行動をきちんと話し合っておくことで、離れ離れになった家族を探したり、とっさの判断に迷ったりして逃げ遅れたりすることを防ぎます。東日本大震災では、すでに避難した家族を、そうとは知らずに探しに行き、津波に巻き込まれ、尊い命を落とすという悲劇がありました。互いを探して共倒れになることを防ぐという観点からも大切な考え方です。

「津波てんでんこ」・「命てんでんこ」の本当の意味を理解し、普段から地域で、或は家族間であらかじめ話し合い、避難方法を決めておくということが、命を守ることに於いて極めて重要だと思います。

交流を深め助け合える関係を

高井 賢太 (建設請負業)

震災から4年が過ぎようとしています。復興の進行状況はこれから最終段階に入る段階のように思います。

集団移転の造成が次々と引き渡しが始まり、復興住宅の建築が軒並み建って行く状況です。

その中で材料、作業員の不足などいろいろな問題があるでしょうがその問題を乗り越え頑張ってもらいたいです。

この震災を経験して、近所との助け合いやたくさんの人たちの援助支援が本当に有難かった事を覚えていますので、次代の子供たちにも皆さんの付き合いを大切にし、交流を深め助け合える関係が育める事を願っています。